

千葉県立中央博物館分館 海の博物館

うみ鳥っぷ2 [umi-Trip 2] —海鳥と旅する食物連鎖の世界

開催期間：2025年12月13日（土）～2026年3月15日（日）



企画展示会場入口



海鳥の天敵となる捕食者たちの剥製標本



採餌態勢の海鳥の剥製標本を並べて
日本の海鳥の餌場を表現した展示風景



漁業等の人間活動と海鳥や海の生態系との
かかわりを示した展示

【企画展の内容・目的】

- 本展示は海鳥を取り巻く食物連鎖をテーマとし、1) 海の生物多様性と生態系の複雑さ、2) 海と陸の生態系をつなぐ海鳥の役割とその重要性、3) 人間の営みが海鳥を取り巻く食物連鎖に及ぼす影響を伝えることを目標とした。これを実現するために、内容を効果的に伝えられるユニークな剥製標本（海鳥の捕食・被食シーンや死体の漂着ジオラマ等）や映像資料等を制作し、連携機関からの借用資料も加えて展示した。
- 海の生物多様性や、人が海鳥や生態系に及ぼす影響といった展示内容の理解を促すために、学芸員による展示解説、海鳥の餌でもある魚の調理講座、漁港散策やフェリー乗船による海鳥観察会などの付帯事業を開催した。
- 海鳥の死体や糞から陸上生態系が育まれる様子や、海と陸とのつながりを伝える展示を通じて、来館者の視野を地球史レベルの時空間スケールに広げ、尊い地球環境を守る仲間を増やしたいと願い、事業に取り組んだ。

1. 企画展示の内容

■開催期間：2025年12月13日（土）～2026年3月15日（日）

■開催場所：千葉県立中央博物館分館 海の博物館 研修室

■入場者数：11,591 人



海の博物館 入口



企画展示会場 入口



第1章の導入部分

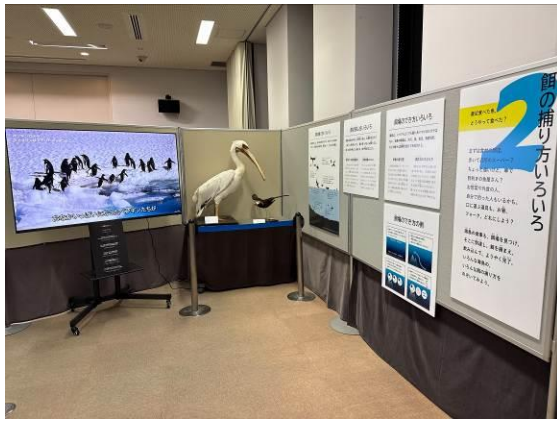


第1章の中盤部分

展示は4つの章で構成した。章ごとに生まれた「海の学び」の成果を報告する。

第1章「食物連鎖の世界へGO!」は、いかに多様な生物が、いかに複雑な関係を持って自然界が構成されているのかを伝えることを目的として、展示室の半分を割いた本展示の核となる展示である。前半では国立極地研究所から借用した南極海の生物標本などを用いて、多様な海洋生物（藻類等、プランクトン、ベントス、ネクトンに分類）とそれぞれを餌とする海鳥、そして海鳥の天敵の標本を多数展示して、海の生物多様性を伝えた。事業成果物の一つである潜水性海鳥のウトウを捕食するキアンコウのはく製標本の迫力は凄まじく、本展示の目玉として多くの来館者を惹きつけた。後半では、餌生物から海鳥に取り込まれる寄生虫やウイルス、また海鳥の死体を分解する腐肉食性昆虫や、そこから始まる陸上生態系の食物連鎖など、自然界において食物連鎖を通じて広がる多様な生物どうしのかかわりを、様々な切り口から取り上げた。そして、死体が分解されることで、再び栄養が川を下って海に注ぎ、海食物連鎖へとつながる循環について解説した。この循環を体感できる工夫として、第1章を何度もループできる順路を設定した。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。

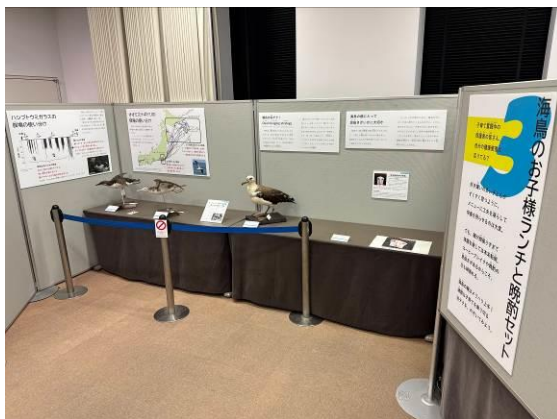


第2章の導入部分



日本の海鳥の餌場を表現した展示風景

第2章「海鳥の餌の捕り方いろいろ」は、海鳥の餌場がどのようにしてでき、そこを海鳥がどのようにして探し当て、そこで海鳥がどのようにして餌を食べるのかを、種ごとに異なる体の特徴に着目して伝える展示である。見た目が大きく異なるペリカンとエトピリカを並べ、各種の体がそのように進化した背景を、来館者が考えるきっかけを与えた。続いて海鳥各種の体の特徴がよく表れた写真を並べ、翼の長さ、みずかき、くちばしや舌などの形の多様性と、それぞれの形の利点を紹介した。また、5種類の実鳥の採餌行動を収めた動画をモニターに上映し、実際に海鳥が体をどのように使って餌を食べているのかを視覚的に伝えた。最後に、日本に分布する海鳥の採餌もしくは索餌態勢の剥製標本と、餌生物であるトビウオとトビイカ（いずれも事業成果物）の剥製標本を並べた見た目にもにぎやかな展示を設け、日本の豊かな海とその上に成り立つ海鳥の餌場を表現した。これら一連の展示を通じて、海洋生物の多様性が、それらを食べる海鳥の多様性にもつながっていることを示した。



第3章の展示全景



オオミズナギドリとハシブトウミガラスの剥製標本

第3章「海鳥のお子様ランチと晩酌セット」は、スペースこそ小さいものの、本展示の中で最も海鳥らしさを凝縮させた展示である。一回の繁殖で育てられる雛の数が少なく、寿命が長いことは、海鳥の大きな特徴である。そのことを効果的に伝えるため、75歳の現在も卵を産み続ける「Wisdom」と名付けられたコアホウドリの雌を主人公とした英語の絵本を展示し、多くの来館者に閲覧してもらった。海鳥が生涯に残す子孫の数を増やすには、長生きが重要である。つまり海鳥の親鳥は、繁殖成功だけでなく、自身の体調管理にも気を使わなければならない。そのために、雛のための餌と親鳥自身のための餌とで、餌場を使い分けるオオミズナギドリとハシブトウミガラスの生態を紹介している。これらの生態は、GPSや深度ロガーを用いたバイオリギングによって解明されたもので、本展示の企画者（平田）が関わった成果も含まれる。来館者が海洋生物学の最前線に触れ、博物館や学芸員、海洋生物学を身近に感じられる機会を提供できたことも、本展示の副次的な成果の一つである。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等ではできません。



第4章の展示の様子



目玉展示である、ネコによる海鳥の捕食シーンを再現した剥製

第4章「海鳥と人とのかかわり」は、海鳥と人が食物連鎖でつながっている例や、海鳥や海洋生物の食物連鎖に人が与えている影響などを、各論的に列挙した展示である。直接的な食物連鎖の例として、日本人や北極圏の先住民が海鳥を食べてきた歴史を、主に写真資料によって紹介した。海鳥の糞が化石化したリン鉱石が、肥料として採掘されてきた歴史も取り上げた。また、漁業と海鳥のかかわりについて、漁灯による夜間採餌への影響、混獲問題、海鳥を目印に瀬戸内海で行われてきた伝統漁法「アビ漁」など、多様なトピックを挙げた。社会問題であるプラスチックによる海洋汚染について、海鳥の胃から検出されたプラスチックや発泡スチロールの実物を展示し、その深刻さを訴えた。最後に、人が野生化させたノネコやネズミによる海鳥繁殖地の壊滅について伝えた。事業成果物であるオオミズナギドリを捕食するネコの剥製標本はインパクトが大きく、来館者の関心を効果的に集めた。

【来館者の声】

- 海鳥の食物連鎖が私たち人間にも影響を及ぼしていること、特に最後のプラスチック、ノネコ、鼠等、改めて人のもたらした影響の大きさを感じました、海・環境に優しい行動をとっていきます！
- 鳥が入口でしたが、職にかかわる生物の多様性を改めて知り、それを育む海の大切さを強く実感しました。
- 海にはたくさんの生き物がいて、どの生き物もつながっていることが分かった。
- 海には自分が知っている生き物より多くの生き物がいることや、その生き物のくらしが分かってよかった。
- 様々な生物が相互に関係し合って成り立つ世界、人間の介入が大問題。豊かな海を守ることを考え、行動したい。
- 漁業や観光が知らぬ間に与えている海への影響が知れた。
- 世界と人、いろいろな生物がつながって生きていけるんだという改めての思い。
- いろいろな生きものがいたから、これから海ぜんたいの海をかんじたいです。
- 人間のした事で、色々な影響があり、動植物を減らしてしまっているのは、さみしい。
- 知らないところで、生き物の食べる・食べられるが常に繰り返されているんだなのを視覚的に実感しました。
- 人が安易に生態系をこわしている現実を思い知ることができた。
- 海の生態系の上位にいる海鳥を守ることへの重要性。

2. 関連事業の内容

■うみ鳥っぷトーク①

【開催日時】2025年12月13日（土）14:30～15:00

【開催場所】千葉県立中央博物館分館 海の博物館 研修室

【参加者数】10人

【実施内容・目的】

- 本展示の企画者（平田）が展示室を案内し、展示内容を解説した。展示期間中の毎月第2土曜日に開催しており（当日申し込み制）、第1回は展示全体をダイジェストで取り上げた。
- 企画者が展示の見どころをストーリー立ててわかりやすく解説することで、来館者に展示で伝えたいポイントを明解に理解してもらうことを目的とした。



バイオフィルムを食べるシギ類について
解説する様子



「ハシボソミズナギドリ漂着状態の剥製標本」を用いて
海鳥の死体に集まる昆虫について解説する様子

本展示の企画者が、各参加者の興味や理解度に合わせて解説することができた。事業成果物であるウミウ捕食痕付アユの標本を用いることで、特に第2章の海鳥の体の特徴と餌の捕り方との関係を、わかりやすく印象にも残るように解説することができた。個別の質問にも対応することができ、展示内容である海洋生物学に関する情報や、博物館や学芸員による研究・教育普及活動に対して興味と理解を深めてもらうことができた。

【来館者の声】

- 人間の暮らしにも海鳥が強く関わっていて、海がその関わりを支えていると感じた。
- 学芸員の熱意をすごく感じました。新たな知識を得られることはとても嬉しいです。
- 「食」にフォーカスしたアプローチがとても興味深かったです
- 知的好奇心を満たせた

■うみ鳥っぷトーク②

【開催日時】2026年1月10日（土）14：30～15：00

【開催場所】千葉県立中央博物館分館 海の博物館 研修室

【参加者数】14人

【実施内容・目的】

- 本展示の企画者（平田）が展示室を案内し、展示内容を解説した。展示期間中の毎月第2土曜日に開催しており（当日申し込み制）、第2回は第1章をダイジェストで取り上げた。
- 企画者が展示の見どころをストーリー立ててわかりやすく解説することで、来館者に展示で伝えたいポイントを明解に理解してもらうことを目的とした。



大勢の参加者でにぎわう解説の様子



参加者の関心を惹くアイテムとして
「ウミウ食痕付アユの標本」を活用した

本展示の企画者が、各参加者の興味や理解度に合わせて解説することができた。事業成果物であるウトウを捕食するキアンコウの標本は、食物連鎖が必ずしも「魚→鳥」の一方向ではなく、多様な生物が複雑にかかわり合っていることを、印象にも残るように解説することができた。個別の質問にも対応することができ、展示内容である海洋生物学に関する情報や、博物館や学芸員による研究・教育普及活動に対して興味と理解を深めてもらうことができた。

【来館者の声】

- 食物連鎖があるからこそ海や陸の生態系が守られていることを学んだ。
- 鳥・海・生き物とすべてつながっているという事を実感しました。
- （展示と解説の内容が）海鳥からいろいろな方向に広げてあったので、身近にとらえることができました。
- 人間の生活が海に与える影響を今一度考えました。
- 海と言うと魚に目が行きがちですが海鳥にも注目してみたいと思いました。

■海鳥はグルメ？実証クッキング！

【開催日時】2026年2月11日（土）10：30～13：00

【開催場所】勝浦市芸術文化交流センター キュステ

【参加者数】8人

【実施内容・目的】

- 千葉県では多くの海鳥が越冬し、県産の魚介類を捕食している。千葉県産の魚介類を調理することで、海鳥と同じものを食べ、人と海鳥が食物連鎖でつながっていることを実感するとともに、千葉県の海の豊かさを感じ、多くの海鳥が生息する背景を探ることを目的とした。
- 千葉県の海鳥や水産業に関する座学を行い、これらについて理解を深めたうえで調理に臨むことで、より効果的な海の学びを求めた。



老若男女多様な参加者全員で記念撮影



講座で用いた鴨川産マサバとマアジ



鈴木氏による千葉県の水産業に関する講座



ぬいぐるみを用いた講座で
小学生の参加者も楽しめた

本展示の企画者（平田）が千葉県の海鳥について、ゲスト講師として（一社）サステナブルシーフード協会代表理事・東京海洋大学特任助教の鈴木允氏が千葉県の水産業（特に勝浦のカツオ漁業）について講演し、カツオ漁の餌にする小魚が周辺の定置網などでよく獲れることが、勝浦でカツオ漁が発展した背景にあることなどを学んだ。鈴木氏の講座には、ぬいぐるみなどの仕掛けが随所に盛り込まれ、小学生の参加者も熱心に聴き入った。



「おさかな普及員」から
サバの捌き方を教わった



捌いたサバとネギやショウガなどの薬味を
鍋で炒め、サバのおぼろを調理した

調理実習では千葉県水産課と連携し、同課が推進する「おさかな普及員」制度を活用した。勝浦水産事務所が鴨川漁協で調達したマサバとマアジを食材とし、勝浦漁協女性部所属の2名の普及員が調理を指導した。大人でも初めて魚を捌いたという参加者も多かった。



捌いた魚の消化管は、胃内容物や寄生虫を
観察するためにトレーに分けた



マサバのおぼろとマアジの刺身を実食し
参加者全員で海鳥の気分を味わった

マサバはおぼろ、マアジは刺身にした。千葉県産の魚を実食し、千葉県の海の豊かさを感じるとともに、そこを生息地として選ぶ海鳥が多いことに納得した。また、捌いた魚の消化管を解剖し、胃内容物の甲殻類や、アニサキスなどの寄生虫を観察し、海の世界に触れた。

【来館者の声】

- 多方向からの視点ですべてが結びつく、海の恵みを深く知れる内容でした。実習も楽しかったです！
- タイトルからは想像できない展開がいろいろあり、盛りだくさんで楽しかったです。
- 「魚」を様々な方向から学べて楽しかった
- 魚のことも知れたし、漁業についても知らないことが多いことが分かった。漁師さんに感謝して魚を食べたいです。

■うみ鳥っぷトーク③

【開催日時】2026年2月14日（土）14：30～15：00

【開催場所】千葉県立中央博物館分館 海の博物館 研修室

【参加者数】17人

【実施内容・目的】

- 本展示の企画者（平田）が展示室を案内し、展示内容を解説した。展示期間中の毎月第2土曜日に開催しており（当日申し込み制）、第3回は第2章をダイジェストで取り上げた。
- 企画者が展示の見どころをストーリー立ててわかりやすく解説することで、来館者に展示で伝えたいポイントを明解に理解してもらうことを目的とした。



「ウミウ食痕付アユの標本」を用いて
海鳥の餌の捕り方について解説する様子



展示パネルを指差して、海鳥のみずかきの
形について解説する様子

本展示の企画者が、各参加者の興味や理解度に合わせて解説することができた。事業成果物であるウミウ捕食痕付アユの標本を用いることで、特に海鳥の体の特徴と餌の捕り方との関係は、わかりやすく印象にも残るように解説することができた。個別の質問にも対応することができ、展示内容である海洋生物学に関する情報や、博物館や学芸員による研究・教育普及活動に対して興味と理解を深めてもらうことができた。

【来館者の声】

- 海っていろいろな生き物がいてすごいなと思いました。
- 種間の傾向の違いによる独自の生存戦略に興味をそそられた。
- 大小さまざまな生物が生きのびるための生活をしていることがわかった。水かきが2種類あることも知りました。
- 「生き物との共存、それぞれの命を大切に！」を改めて強く感じました！
- 知らなかった食物連鎖について学ぶことができました。特に、アンコウが海鳥を食べるということにおどろきました。

■銚子漁港でカモメに包囲されよう！

【開催日時】2026年2月21日（土）10：00～14：00

【開催場所】銚子漁港、銚子ポートタワー

【参加者数】27人

【実施内容・目的】

●日本一の水揚げ量を誇る銚子漁港では、多くのカモメ類が越冬する。その種数と個体数に圧倒されるとともに、人間活動が海鳥を取り巻く食物連鎖に与える影響の一端を垣間見ることがを目的とした観察会を開催した。

●銚子漁港で水産物の水揚げとそこに集まるカモメ類を観察し、そこにカモメ類が集まる理由を探る座学を行い、最後に銚子ポートタワー最上階の展望室に昇り、漁船の動きに対応するカモメ類の大群を見下ろした。



受付後の趣旨説明の様子



道路に落ちたイワシを観察しながら歩を進める様子



カモメ類についての解説を聞きながら望遠鏡や双眼鏡をのぞいて観察する様子



水揚げする漁船の周りに集まったカモメ類の行動を観察する様子

銚子漁港で水揚げとそこに集まるカモメ類を観察した。ちょうど巻き網漁船の水揚げに遭遇し、イワシ類を船からトラックに積み替えて、荷台からこぼれ落ちた3種のイワシ類を観察した。当館の魚類担当の学芸員が補助スタッフとして参加し、魚を見分けることができた。カモメ類の識別は難しいが、本展示の企画者（平田）が望遠鏡で参加者に各種カモメ類を見せることで、種ごとの違いを認識しながら11種のカモメ類を観察することができた。



銚子の地形や歴史に関する講座の様子



銚子のカモメ類に関する講座の様子

この観察会は、銚子ジオパークと連携して開催した。座学では、ジオパーク専門員の上田脩郎氏が銚子で水産業が栄えた歴史的背景を、地質と地形の成り立ちにまで遡って解説した。また、平田が銚子に多様なカモメ類が集まる理由として、銚子がアジアの東端かつ太平洋の西端に位置するため、ユーラシアとアメリカの両大陸に分布するカモメ類が集まることを解説した。海の学びは、分野横断的かつ地球規模の視野で取り組むことが大切だが、この座学によって、時空間的に広い目線で海鳥を取り巻く食物連鎖について捉えることができた。



銚子ポートタワー展望室から銚子の地形と水揚げやカモメ類の行動を観察する様子



観察会解散前のまとめの様子

観察会の最後に、銚子ポートタワー最上階の展望室から銚子漁港を見下ろした。利根川が太平洋にそそぐ河口が見え、陸の栄養が海に運ばれて、豊かな海が育まれ、そこが海鳥にとっての餌場や人間にとっての漁場になるというストーリーを視覚的に捉えることができた。また、イワシ類の水揚げやカモメ類の行動の観察と座学を通じて、漁業という人間活動が海洋生態系に及ぼす影響の一端を、垣間見ることができた。

【参加者の声】

- 人間たちに見えないところ（海）で、鳥や魚の生活があるということを感じた
- 地形や歴史、いろいろなものが重なって今の海になっていると知って、キセキだなあと思いました！
- 海というか、地球環境を守ることの大切さを知りました。地球にいる生物がうまく共存して生活していけたらと願います。
- 海と一言で言っても成り立ちや地形によって、性質が様々であることを学んだ。
- カモメを主体として考えてしまいがちだったが、カモメが集まるにふさわしい歴史や地形があると知って、地域全体に愛着をもった。

■うみ鳥っぷトーク④

【開催日時】2026年3月14日（土）14：30～15：00

【開催場所】千葉県立中央博物館分館 海の博物館 研修室

【参加者数】11人

【実施内容・目的】

- 本展示の企画者（平田）が展示室を案内し、展示内容を解説した。展示期間中の毎月第2土曜日に開催しており（当日申し込み制）、第4回は第3章をダイジェストで取り上げた。
- 企画者が展示の見どころをストーリー立ててわかりやすく解説することで、来館者に展示で伝えたいポイントを明解に理解してもらうことを目的とした。



野鳥の最高齢記録を更新中のWisdomという名のコアホウドリが主人公の絵本を手で解説する様子



絵本を開いて海鳥の特徴を解説する様子

本展示の企画者が、各参加者の興味や理解度に合わせて解説することができた。第3章は展示物が少ない一方で、最も海鳥らしさが凝縮された展示なので、展示物だけでは説明しきれなかった情報や研究のこぼれ話などを交えて解説した。特に、海鳥は長寿だが一度に育てられる雛の数は少なく、ひとたび減少すると個体数が回復しにくいことを伝えた。個別の質問にも対応することができ、展示内容である海洋生物学に関する情報や、博物館や学芸員による研究・教育普及活動に対して興味と理解を深めてもらうことができた。

【来館者の声】

- 海鳥は1回に1個しか卵を産まないなので保護の重要性を実感しました
- 海鳥をかわいいとは思っていませんでしたが、観察したいと思います！
- ハシブトウミガラスがヒナの為に通常よりも深く潜る親心に感動しました！
- 知ることから守ることへ、自分に何ができるか。
- 人と海のつながりを感じた。
- 食物連鎖の循環、多様性、宇宙のような印象でした。人間も一員なのだから、あまり逸脱した存在にならないように祈ります。

■東京湾フェリーに乗って考える、海鳥の餌づけ

【開催日時】2026年3月15日（土）10：00～12：10

【開催場所】東京湾フェリー（金谷港⇄久里浜港 往復）

【参加者数】33人

【実施内容・目的】

- レクリエーションとして、船に乗って海鳥へのスナック菓子やパンなどの餌づけを楽しむ人は多い。東京湾フェリーは海鳥に餌づけしないよう乗客に呼びかけているが、餌づけを期待して船に寄るカモメ類を間近で観察することができる。その観察を通じて、人間による海鳥への餌づけが海鳥や海洋生態系に及ぼす影響を理解するとともに、海を利用した人間活動の目指すべき在り方を考えることを目的とする。



受付の様子



乗船の様子



船上で鳥の位置を伝える様子



船上で解説する様子

東京湾フェリーは約40分で房総半島と三浦半島を横断する。これに1往復乗船し、海鳥の種類や行動を観察した。カモメ類やミズナギドリ類など、海鳥の種ごとに飛翔高度や羽ばたきなどの行動が異なることや、それぞれの海鳥が東京湾に飛来する理由などを解説した。この観察会では、一般的に近くで観察するのが難しい沖合での海鳥の行動を間近で楽しむ体験を提供し、海鳥を安全かつ手軽に親しめる方法を普及することができた。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。



釣り船に集まるカモメ類を観察する様子



久里浜港停泊中に往路のおさらいをする様子

ウミネコやユリカモメなど、多くのカモメ類が人間からの餌づけを期待して船の近くに寄ってくると期待されたが、そのような現場には遭遇しなかった。東京湾フェリーでは近年海鳥への餌づけを行わないよう乗客に呼び掛けており、その効果が実感できた。代わりに、数多く出ている釣り船の周りに待機して、おこぼれを狙うカモメ類を観察できた。様々な人間活動が、非意図的に海鳥への餌づけを発生させている現実を理解する機会が得られた。



下船後にまとめの解説をする様子



参加者どうして餌づけについて意見を交わす様子

餌づけ由来の栄養価の乏しい餌を利用する海鳥は繁殖成績が低下することや、非繁殖期にも若齢個体ほど餌づけへの依存度が高いことなどが、本展示の企画者（平田）による研究などから明らかになっている。下船後に、これらの知見を紹介し、餌づけが海鳥や海洋生態系に及ぼす影響について、参加者どうして考え、意見を述べ合った。この観察会では人間が海洋生物に及ぼす影響の一例として餌づけを取り上げたが、海を利用した様々な人間活動について、課題や目指すべき在り方を考えるきっかけを提供することができた。

【来館者の声】

- 漁船のほうがフェリーよりエサをもらいやすいため海鳥が集まりやすいことを学んだ
- 外海と内湾を比べ実感できた。
- 非意図的な餌づけについて問題に思ってたけど、そうでもないんだなと思った
- 海も鳥に資源を与えているが、餌の良し悪しがあり、生きるのは簡単ではない。
- 普段考えない餌づけに対して思考できた
- 海鳥にはじめて注目しました。魚ではない生き物もいることをあらためて感じ、この海が環境が守られていくことができることがあったらお手伝いしたいと思いました。
- 東京湾で意外につり船が多かった。その割に、おこぼれをねらう鳥は少ないと感じた。

【事業全体のまとめ】

本サポート事業の活用により最も助かったことは、展示の趣旨を効果的に伝えるのに役立つユニークな剥製標本を充実させられたことである。特に、ウトウを捕食するキアンコウ、マアジを捕食するウミウ、ハシボソミズナギドリの漂着死体、オオミズナギドリを捕食するネコのように、自然界のワンシーンを切り取ったジオラマ的で動きのある展示物は、「食物連鎖」という展示のテーマはもとより、多様な生物の関わり合い、海鳥の採餌生態、人間活動が自然界に及ぼす影響、自然保護の重要性といった展示で伝えたいメッセージを、文字による解説や写真パネルとは全く違う次元で来館者の心に印象づけることができた。本サポートを受けて制作した展示物が来館者に与えた影響の大きさは、アンケートで印象に残った展示物としてキアンコウやネコを挙げた回答が顕著に多かったことが証明している。本展示には、令和3年度にサポートを受けた「うみ鳥っぴ [umi-Trip] ー海鳥とめぐる島の旅・半島の旅ー」で制作した標本も活用した。今回新たに制作した展示物も、例えば「底魚を捕食するウミウ剥製標本」と「ウミウ捕食痕付アユの標本」は、当館が主催する令和8年度収蔵資料展「うみ鳥っぴ3 [umi-Trip 3] ーウミウと渡る日本列島縦断紀行ー」でも活用予定であるように、今後も「海の学び」の様々な場面で繰り返し活用したい。

3. 主な連携・協力先について

連携・協力先名称	連携・協力の内容
1. 甕ミュージアム	事業終了後の巡回展示会場
2. うぶあがり人と自然のミュージアム	事業終了後の巡回展示会場
3. 国立極地研究所	展示資料の借用
4. 我孫子市鳥の博物館	展示資料の借用
5. 千葉県立中央博物館	展示資料の借用
6. 千葉県立中央博物館大利根分館	展示資料の借用
7. 港湾空港技術研究所	展示資料の借用
8. 群馬県立自然史博物館	展示資料の借用
9. 東洋大学	展示資料の借用
10. 東京農業大学	展示資料の借用
11. 御蔵島観光協会	展示資料の借用
12. 東京動物園協会	展示資料の借用
13. 北九州市立自然史・歴史博物館	展示資料の借用
14. 鴨川シーワールド	展示資料の借用
15. 勝浦市教育委員会	付帯事業の会場
16. 千葉県水産課・勝浦水産事務所	付帯事業における講師・材料提供
17. 勝浦漁業協同組合	付帯事業における講師
18. サステナブルシーフード協会	付帯事業における講師
19. 東京海洋大学	付帯事業における講師
20. 銚子ジオパーク	付帯事業における講師

4. 主な広報結果について

掲載媒体名	見出し、掲載日
1. いすみライフ 590 号	「情報広場」、2025 年 12 月 13 日
2. 朝日新聞	東京夕刊「美術館・博物館」、2025 年 12 月 16 日
3. 県教委ニュース Vol.370・371 合併号	「イベント情報」、2025 年 12 月 24 日
4. いすみライフ 591 号	「情報広場」、2026 年 1 月 10 日
5. 朝日新聞	千葉全県朝刊「ちばマリオン」、2026 年 1 月 27 日
6. 千葉教育 No. 695 梅号	「情報アラカルト」、2026 年 1 月 29 日
7. 読売新聞	千葉「イベントガイド」、2026 年 1 月 30 日
8. 房日新聞	海鳥巡る食物連鎖を紹介 海の博物館で企画展示 勝浦 2026 年 2 月 10 日
9. 広報かつうら No. 971	「インフォメーションガーデン」、2026 年 2 月 13 日
10. BIRDER 2026 年 4 月号	「BIRDER' s BOX」、2026 年 3 月 16 日

以上

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はありません。